



Title	コロナ禍の遠隔授業における3つの実践の比較分析
Author(s)	東矢, 光代
Citation	琉球大学欧米文化論集 = Ryudai Review of Euro-American Studies(65): 1-23
Issue Date	2021-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/47906">http://hdl.handle.net/20.500.12000/47906</a>
Rights	

## コロナ禍の遠隔授業における3つの実践の比較分析

東矢 光代

### 1. はじめに

2020年は輝かしいオリンピックイヤーのはずであった。英語教育にとっては、小学校英語が教科化される新学習指導要領の全面実施開始年度という重要な年にあたっていた。英語教育の早期化・強化は、東京オリンピックのために来日するであろう外国人への対応と、それによる日本の国際化と無縁ではなかったはずである。しかし、新型コロナウイルスの世界的なパンデミックは、私たちの生活を一変させた。2020年10月22日時点で、沖縄県の新型コロナウイルス警戒レベルはレベル3の「感染流行期」ではあるが、1か月半ぶりに病床占有率と、直近1週間の新規感染者数が第4段階（感染蔓延期）」に上がるなど、後期に入っても感染状況は一進一退を繰り返している（毎日新聞、2020年10月22日）。琉球大学の10月からの後期授業についても、対面授業は極めて限定的であり、多くの授業が前期からの遠隔対応を継続することになり現在に至っている。

2020年がこのような年になろうとは、誰が想像しえただろうか。先述のように、小中高の学校現場にとって、今年は全面改訂された新学習指導要領の皮切りの年にあたる。英語科においては、小学3年生からの外国語活動開始と小学5・6年生での教科書と評価を伴う、教科としての英語科目の開始という、大きな変革の年であるが、それだけではなく、すべての教科において「主体的・対話的で深い学び」という言葉で体现される「アクティブラーニング」の教え方・学び方が、求められる年として認識されていたのである。それが、2020年3月には全国で一斉休校の措置が取られ、全国一斉の緊急事態宣言（4月17日～5月6日）を受けて、生徒が学校に來れない状況下での教育を余儀

なくされることになった。(登校再開に関しては、沖縄タイムス 2020 年 5 月 8 日記事など参照。)

コロナ禍での教育の選択肢として、大学はいち早く、遠隔授業対応を行ったと言える。文部科学省は 3 月 24 日付で「令和 2 年度における大学等の授業開始等について (通知)」を發出し、新型コロナウイルス感染防止の観点から、遠隔授業を取り入れる可能性について言及し、4 月 1 日には「学事日程等の取扱いや遠隔授業の活用についての Q&A」を立ち上げた (大学ジャーナルオンライン, 2020 年 3 月 25 日)。さらに 4 月 21 日の事務連絡により、その更新を通知しているが、そこでは 2020 年 4 月からの大学授業を基本的に遠隔で行うために必要な情報を中心となっていた。国立情報学研究所 (NII) は 2020 年 3 月 26 日から、「4 月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」を定期的にオンライン開催しており、大学を中心とした各学校機関での遠隔授業の取組や調査結果の公表、課題の共有を行っている (10 月 23 日時点で第 19 回を実施)。その中で、4 月 3 日実施の西山崇志 (文部科学省高等教育局専門教育課企画官) の発表では、副題が「ピンチをチャンスに。大学・高専の遠隔授業の推進」となっており、大学・高専においては遠隔授業の環境構築を加速させ、人生 100 年時代におけるリカレント教育も視野に入れた学修機会の確保が施策として説明されている。

このような状況を受けて、筆者の本務校である琉球大学においても、2020 年前期は基本的に全部遠隔授業という方針となり、教員は慌ただしく対応していった。本稿では、筆者が 2020 年前半に実施した遠隔教育を概観し、その分析を通して、遠隔授業におけるオンデマンド (非同期型)、双方向 (リアルタイム、同期型) の強み、弱みを明らかにしつつ、今後コロナの収束に伴い求められるであろう、対面と組み合わせたハイブリッド型の授業について考察する。また分析の過程において、遠隔授業のスキルを徐々に身に付けていった、大学教員としての自分自身の変化も、記録・分析しようとするものである。

## 2. 年度開始（2020年4月）時点での教師としての自分と 遠隔授業開始に至るまで

コロナの影響を強く感じ始めたのは、2020年2月頭のことである。2月7日にシンガポールでの学会発表を控えていたが、1月24日の春節では、中国からの観光客の出足が、経済的期待とコロナの警戒感の両方をもって迎えられていたことを覚えている。その時点では出張は予定通りだった。しかし、2月4日横浜に寄港予定だったダイヤモンドプリンセス号の香港下船客（1月25日）の感染が伝わったことから、一気に日本でのコロナ禍が現実味を帯びた。学会出張はキャンセルし、オンライン動画発表に切り替えたが、その後は実施を担っていた「大学の世界展開力強化事業」による3月中旬の受入集中プログラムも、実際に沖縄に来てもらうのではなく、遠隔で行うことに決まり、実施対応に追われた。

4月に入り、2020年度前期の授業開始日は4月9日の予定だったが、対面で実施できる可能性はかなり低いと感じつつも、一方では、大学全体が遠隔授業に移行するという現実もわかには信じることができないでいた。それでも、遠隔授業への移行は不可避だと自分自身に言い聞かせ、FD実施を支援したり、参加したりしつつ、担当科目の授業内容をオンライン化すべく、検討を始めた。当時はコロナの感染経路や特性について未知の部分が多く、安全面への憂慮から、可能な限り学生との接触を避け、少人数であれば対面も可とされていた大学院の講義も、初回からオンラインでつなぐテストケースとして協力してもらった。4月15日の時点では、それまでほとんど使っていなかった Skype で3名の受講生とつなぐのが精いっぱい、裏で携帯電話で状況を確認しながら、冷や汗ものの船出だった。

当時の筆者は、過去の対面授業でパワーポイント資料を多用したり、Webclass で資料配布と課題の回収を行う、また Google Forms でアンケートを実施するなどの経験があり、ICT に対して苦手感はなかったが、リアルタイムの配信（Zoom など）のホストを務めたことはなく、もちろん遠隔ですべての授業を実施した経験もなかった。授業をオンライン化していく過程においては、FD への参加や情報収集をしていく中で、自分に経験があり、できること

(Webclass, Google Drive)、少しがんばればできそうなこと (Flipgrid, Office 365 Stream, パワーポイントによる動画作成)、そしてハードルは高いが取り入れられるべきこと (Teams か Zoom でのリアルタイム配信) の3種類にスキルを分類し、少しがんばればできそうなことを実際試していきながら、できることも含め、それらを中心にまず授業のオンライン化を試みた。最も不安だったリアルタイム配信は、大学が契約しており、学生に閉じられた環境である Teams を使用すると決め、先述の大学院生3名の講義から、個別の修論指導、卒論指導も Teams でつなぐことで経験値を上げていった。最終的に、ゴールデンウィーク明けの5月7日からの正式授業開始が伝えられた時には、連休前に Teams で5名、14名のクラスでテスト接続を行い、21名の登録があった上級英語演習については、連休明けに Teams でつなぐことができた。なお Zoom については、FDに参加したり、参加者としてセミナー等を経験する機会は多かったが、本務での講義に関しては Teams に慣れることが最優先であった。そのため、後述する本稿の3番目の実践例での Zoom 使用 (2020年9月) が、初めての本格的な授業での活用であった。

上記のプラットフォーム使用に関する状況を踏まえ、授業の達成目標を変更せずに、授業の方法と学習活動を組みなおし、評価配点も課題ごとに細かく設定し、本格開始の5月の授業では、受講生に提示できるように準備した。従来、受講生の状況やクラスのダイナミクスに合わせ、課題内容や配点は適正になるよう、学期中でも修正・提示してきたのだが、学生と一度も対面せず、クラスの状況を把握せずに学期の最初にすべて決定するというのは、初めての経験であった。不安も大きく、受講生の受け止めも表情が見えないため汲み取れない。そのような中で始まった前期授業であった。

### 3. 研究課題 (リサーチ・クエスチョン)

本研究では、2020年前期に筆者が本務校で担当した「英語科教育法B(2クラス)」と「上級英語演習」の2科目と、非常勤として Zoom でスクーリングを担当した1科目(「英語科指導法Ⅲ」)について、遠隔授業実践の形態と効果を比較分析しようとするものである。以下にリサーチ・クエスチョンを列挙す

る。

- (1) 3つの遠隔授業で取り入れたプラットフォームは、どのような意図をもって選択され、それは授業をオンライン化するにあたり、十分に機能したか。
- (2) 同じ目的を持った授業（英語科教育法Cと英語科指導法Ⅲ）において、使用したプラットフォームに応じた授業実践の工夫と効果は、どのように異なったか。
- (3) コンテンツ中心の英語科教育法・指導法の授業と、英語の技能・スキルの向上を目指した上級英語演習での遠隔授業デザインには、どのように工夫の相違が見られたか。
- (4) コロナ禍で選択の余地がない遠隔授業を行っていく中で、教員はどのように成長したと感じたか。

上記(4)については、ICTを活用した（英語）教育に関するスキルアップが、今までは教員の裁量に任されていた状況が、コロナ禍で一変したことに鑑み、強制的アップデートを行った経験を自己分析し、次の課題につなげようとするものである。

## 4. 授業実践

### 4.1 遠隔授業プラットフォーム

本研究の分析で取り上げるのは、2020年前期に実施した2つの遠隔授業科目（「英語科教育法B（2クラス）」、「上級英語演習」）と、筆者が非常勤を務める通信制大学1科目のスクーリング（「英語科指導法Ⅲ」）である。前述のように、本務である琉球大学においては、「前期の間、授業は基本的に遠隔で行うこと」という決定を受け、5月のゴールデンウィーク明けの5月7日から、本格的な遠隔授業を実施できるように準備する必要がある。筆者は全面遠隔授業の実施を見据え、4月から段階的に準備を行い、連休を前後して、「英語科教育法B」並びに「上級英語演習」について、活動内容に応じたプラットフォームを決定した。表1、表2は対面授業で計画していた活動をどのように遠隔に移行させたかの対比を示したものである。なお英語科教育法Bは、過去

の対面授業においても Webclass を活用しており、一部は対面と遠隔で変更がない。上級英語演習は初めて担当する科目であったため、コロナの影響がなければこのように行う予定だったという対面授業の計画からの変更を示す。

表 1. 活動に応じた遠隔授業プラットフォームの選定（英語科教育法 B）

活動項目	対面（予定）	遠隔（実際）
学習指導案を書き、模擬授業を行うために必要な知識を得る	教師による説明、解説（レクチャー） 事前に読んだ資料を基にしたグループ討議 討議を基に深めた知識を事後レポートとして Webclass 提出	Teams による双方向型配信 Webclass 掲示板や Flipgrid への事前投稿 Webclass への事後レポート提出
学習指導案、教授資料の作成と提出	当日印刷して持参・配布 パワーポイント資料等も当日持参 学期末に修正して Webclass に提出	事前に Webclass 掲示板にアップロード提出 修正版は学期末に Webclass に提出
模擬授業の実施と討議、実施後のふり返し並びにフィードバックコメント共有	クラス全体で教師役と生徒役に分かれて実施 司会・撮影班など運営もローテーションで担当 模擬授業後グループ討議とフィードバックコメントを Webclass に提出し教員がまとめて「通信」を発行・配布	教師役の1名又は2名のみ教室に来て実施・教員が撮影し録画をOffice 365 Streamでオンデマンド配信実施コメントと動画視聴によるフィードバックをWebclass掲示板に投稿
模擬授業のふり返し	期末課題レポートとして Webclass に提出	期末課題レポートとして Webclass に提出

表 2. 活動に応じた遠隔授業プラットフォームの選定（上級英語演習）

活動項目	対面（予定）	遠隔（実際）
教師が指定した TIME Online の記事を全員で1つ読んで理解、意見交換し要約を書く	教師による説明、解説（レクチャー） 学生による質問や意見（教師対クラス、またはグループ・ペアワーク）	Teams による双方向型配信 Google Forms 等による Pre-reading activity、質問投稿 Google Document へのコメント・質問付加⇒Webclass 掲示板に変更 Flipgrid へのコメント投稿 Webclass への要約提出
自分で選んだ記事を読み、内容と意見をグループでシェアする	グループワーク	ペアに変更し、Flipgrid に発表動画の投稿とコメント動画投稿 (発表しない学生は Webclass 掲示板で教師の質問に解答)
グループ内で発表・意見交換した記事の中から1つを選び、クラスでプレゼンテーションする	グループ・発表者対クラス	

受講生の混乱を避けるために、学期初めに選定したプラットフォームから変更はしないよう心掛けたが、上級英語演習の Google Document に関しては、修復したい問題が生じたため、学期途中で Webclass の掲示板に切り替えた（詳細については 5.1 参照）。

非常勤で担当した「英語科指導法Ⅲ」は主に社会人学生が受講し、指定教科書に基づく課題レポートを提出したのちに、1日（80分×4コマ）のスクーリング（SC）を経て、2単位が付与される科目設計になっていた。レポートは元々対面を想定しておらず、電子または紙媒体での提出と添削を想定していたが、SC に関しては、指導演習（実技）を対面から全面遠隔（Zoom）への変更を余儀なくされた。ただし、Zoom による SC に関しては、同大学の FD が複数回、事前に催され、SC 当日も職員による Zoom のホスト支援があった。



#### 4.1.1 Webclass の活用

Webclass は学習管理システム (Learning Management System, LMS) の一種で、琉球大学では全学的に導入されていた。筆者は導入当時から学生への資料配布に利用し、近年は提出レポートの回収機能を活用していた。受講学生たちも Webclass に最もなじみがあると予測し、本実践においては複数の種類のプラットフォームを使うことから、「入り口は全て Webclass」という原則を立て、連絡、他のプラットフォームへのリンクはすべて Webclass で行うことにした。Webclass では、コロナ禍の遠隔授業対応として、全学的に処理できる容量の強化は4月に行われたが、アップロードできるファイル容量制限のため、容量の大きい動画やパワーポイント等の直接配信はできないままであった\*。

#### 4.1.2 Office 365 Stream の活用

Webclass で不足する機能のうち、動画視聴の課題については、大学がすでに全学導入していた Office 365 の中の Stream の存在を知り、これを活用した。英語科教育法 B の課題とした授業ビデオ教材や、TIME Online での記事の選び方等についての上級英語演習の第1回授業内容を独自の動画にまとめたものなどを、オンデマンド型教材としてアップロードし、そのリンク URL を、課題の指示とともに Webclass で受講生に通知した。英語科教育法 B では、対面授業であれば教室内で視聴していた過去の受講生による模擬授業動画や、今年度の受講生が実施した模擬授業動画 (教員が撮影) も Stream 配信を活用した。

#### 4.1.3 Microsoft Teams の活用

次に必要を感じたのが、リアルタイムで双方向授業が可能なプラットフォームの選択であったが、先の Office 365 の活用に合わせて、Microsoft Teams が全学的に利用可能ということを知ったことから、Teams を利用することにした。Zoom も検討したが、2020年4月ごろ、セキュリティの脆弱性が話題になっており、Teams は本学学生に閉じられた条件でクラス参加者の登録が容易だったことが、最終的な判断につながった。また使用してみて、会議 (授業) を録画すると、それが自動的に Stream に保存されてオンデマンド化される環境も、結果的に学生に有益だったと考えられる。しかし、通信量の負荷が大きいのか、カメラをオンにすると不安定であったため、教員のみカメラをオンにして

使用した。

#### 4. 1. 4 Google Drive の活用

Google Drive は gmail のメールアドレスを作成すれば、無料で活用できるクラウドシステムである。インターネットに接続し、ログインさえ行っていれば、Drive 内で 文書作成・編集 (Google Document)、表計算 (Google Spreadsheet)、プレゼンテーション (Google Slides) ソフトの機能を使うことができる。また、Forms と呼ばれる機能では、オンラインのアンケート調査票を簡単に作ることができ、その中に画像や動画も埋め込むことができる。Forms では回答の自動集計機能があり、学生の回答をエクセル様式でダウンロードできる。琉球大学では国際教育センター外国語ユニットが、教育機関用 Google Drive である Google School を取得しており、登録した学生のみでのクローズ環境で、上記のような機能の活用が可能であった。今回の実践では、特に上級英語演習で、Google Document の共有機能と Forms の回答・集計機能を活用した。

#### 4. 1. 5 Flipgrid の活用

結果的に Teams のリアルタイム配信はスムーズに進んだが、4月の準備時期においては、音声による英語コミュニケーション活動が遠隔でどの程度可能であるか、全く予想ができなかった。そのため「上級英語演習」で実施予定であった、受講生による英語プレゼンテーションについては、より低リスクのオンデマンド型の実施を検討した。折しも4月に Flipgrid に関するFDを受講したことから、このシステムの活用を決めた。Flipgrid は、教員が設定したクラスに受講生がアクセスして、動画投稿を行うことができるサイトである。また投稿された動画を視聴して、コメントやフィードバックも動画で投稿することができる。そのため、対面授業であればクラス内で行うペアワークやグループワーク、プレゼンテーションは、すべて Flipgrid を活用して実施した。

#### 4. 1. 6 Zoom の活用

リアルタイム配信について、琉球大学で担当した2科目は Teams を活用したが、非常勤で SC を担当した「英語科指導法Ⅲ」においては、年度当初から「Zoom で実施してほしい」との依頼が明確に出されていた。Teams を活用しつつ、Zoom については授業外のオンラインセミナーや会議に参加する機会が

多々あったことから、その違いや強み・弱みについて、徐々に理解し、イメージ化できるようになった。Zoomの大きな強みは、参加者をグループ分けして、参加者同士で話し合いができるブレイクアウトルームセッション（以下、ブレイクアウト）と、大人数の参加者がすべて顔出しをしても、接続容量の範囲内に収まることだとの理解の下、SCの授業設計を行うことができた。またSC実施に際しては、初回ということもあり、教務職員に技術サポートに入ってもらえたことが安心感につながった。

#### 4.1.7 使用プラットフォームのまとめ

プラットフォームを概観すると、リアルタイムで実施する同期型、受講者が可能な時間帯に視聴や投稿ができる非同期型の分類や、読み書きを基調とする文字モードと、動画などの音声や視聴覚を使うモードの違い、教員が与える教材やテキスト、レクチャーの内容理解を求める一方向性と、やり取りを基調とする双方向性の違いなどがあることがわかる。複数のプラットフォームの組み合わせにより、これらの違いにより生じる（期待する）効果をデザインすることができる。

## 4.2 授業デザインの工夫と受講生の反応

### 4.2.1 英語科教育法B

英語科教育法Bは2クラスあり、2組は14名、3組は5名の登録があった。講義は15回のうち前半と最終回をTeamsのリアルタイムの双方向性で実施し、後半はStreamでの前年度の模擬授業録画動画の視聴（2回）と、授業者（1名又は2名）のみによる教室での模擬授業を教員が録画したものを、Streamで視聴し、そのフィードバックをWebclass掲示板で書き込ませる手法を取った。前年度までの対面授業との比較・変更については、その詳細を表1に示している。課題・活動はできる限り、前年度までの方法を踏襲できるように、遠隔授業をデザインしたが、学期開始時には、学期内に対面での模擬授業が可能になるのかも全く不透明であった。3密を避けた形でのより緩やかな対面授業が認められるようになった2020年10月現在から考えると、かなり厳しい対応であったと見えるが、感染防止を最優先しつつ、最小限の対面と遠隔を組み合わせ

わせたという点では、1つの方策として有効だったと評価している。

学期中、全く不慣れだった Teams でのリアルタイム授業は緊張を伴うものであった。実際開始した5月中、テレワーク中の自宅からの配信においては回線が不安定なことが多く、受講生はカメラオフ、教員側もカメラオフで共有画面のみで進めた回もあった。対面授業のように、講義時間中にペアやグループ活動を取り入れる方法をまだ知らなかったこともあり、オンライン授業中のやり取りは必然的に、教員对学生にならざるを得なかった。したがって、教員側が、事前課題で準備を指示した内容について、時間中は指名して発言してもらう方法を取った。全体に投げかけた場合は、数名の学生が声を上げて回答してくれたが、「お互いが見えないので発言のタイミングがわかりにくい」というのが、学生からの意見であり、反応する学生が固定化傾向であることが、課題だと感じた。

#### 4.2.2 上級英語演習

上級英語演習（夜間主クラス）は3年次対象科目であるが、国際地域創造学部の3年次学生13名と、法文学部（旧カリキュラム）学生12名の合併授業であった。本科目は国際地域創造学部の教職課程認定を受けた英語コミュニケーション科目であり、2015年に作成し、認定されたシラバスに基づく内容で提供する必要があった。図らずも Time Online というインターネット上のデジタル記事を教材とすることが決まっていたため、遠隔授業に移行しやすい側面もあった。しかし、当初予定していた4つのテーマ（Health, Science/Tech, Food and Drink, Ideas）に即した記事の選定は、Time Online のサイト記事が、COVID-19 一色に染まってしまったことから、どのテーマのフォーカスにおいても、コロナ関連の内容が前面に押し出され、Food and Drink に至ってはカテゴリーが消えてしまったことから、Entertainment に切り替えて授業を進めた。

授業デザインは15週を通じて、4つのテーマについて、1回目は教員指定の記事を全員で読んで理解し、意見を交換する、2回目（翌週）はそのテーマ内の記事を自分で検索して読み、内容をクラスに持ち寄って、グループになり、内容を英語で紹介し、質疑応答・意見交換する、そしてその翌週（3回目）は、2回目のグループ内発表の中から、クラス全体に照会したい記事を決めて

プレゼンテーションを行う、という3回を1サイクルとした活動を（表2参照）、4つのテーマについて実施する予定であった。15週のうち、この12回以外では、オリエンテーション（第1週）、中間テスト（第8週）、全体の総括（第15週）を設定してあった。

この内容を可能な限り、遠隔授業に移行しようと試みた結果が、先の表2である。全体の運営方法を整理し、確定する際に特に配慮したのが、Teamsでのリアルタイム配信とFlipgridを活用したオンデマンド型プラットフォームの使い分けである。重複するが、5月の連休明けに遠隔授業を本格的に始める以前、あるいは始めたころは、リアルタイムでの遠隔授業を実施した経験は皆無であり、本当に毎回の授業時間中に、受講者全員がオンラインで参加できるとは到底思えなかった。また、リアルタイムでオンライン授業に学生が集まるのができたとしても、当初のシラバスで意図していたグループでの発表や情報共有は不可能なため、同じ学修目標を達成する（教育効果を期待する）ことは極めて困難である、という認識を持っていた。そのため、自分自身による記事の検索、読解、発表、コメントや意見の共有については、学生が動画を投稿し、コメントも録画で付加できるFlipgridを活用することにしたのである。

クラスでの対面授業ができないことで、もう1点配慮したのが、グループ活動からペアワークへの変更である。対面授業の計画では、4名のグループで4つのテーマ・記事の紹介と発表を行うことにしていたが、授業で毎週会わない、しかも授業外においても、感染防止の観点から、できるだけ学生同士の集合を抑制する意味もあり、2名で交互に課題を分担する方式を提示した。幸運なことに教員自身はすべての受講生と面識があり、過去の科目担当での状況も踏まえて、ほとんどの受講生を既知のパートナーと組み合わせることができた。その条件に当てはまらない場合は、可能な限り、ペアで取り組む課題がスムーズに進むよう支援を試みた。

この授業では、自作のオンデマンド動画を多く取り入れた。第1回のオリエンテーションでは、TIME Onlineの記事の探し方の演習を実施予定だったが、対面はかなわなかった。その代わりに、授業で説明したかった内容をパワーポイント資料にまとめ、それに顔を出した形のナレーションを付けて、動画を

Office 365 の Stream でオンデマンド配信した。また、苦手とする学生が散見された英語記事の要約・意見 (Review) の課題については、「How to Write a Good Review」という動画を、独自に実施した中間アンケートで希望が多かったスピーキング向上へのヒントについては「How to Speak Fluently」という動画を制作し、オンデマンド配信することで、学修への支援を行った。

#### 4. 2. 3 英語科指導法Ⅲ

英語科指導法Ⅲではスクーリングの90分4コマを、1日集中でZoom配信により行った。受講生は17名で、大半が社会人、17名中10名が職業に「教員」との記載があり、すでに学校現場に勤務しつつ、中学校英語科の免許状取得を希望している状況であった。中学校免許に必要な教授法の単位は8単位であり、英語科教育法ⅢはⅠ～Ⅳの8単位の中の3番目の必修科目と位置付けられ、主に4技能(聞く、話す、読む、書く)の指導演習と、評価について学習する内容となっていた。当初は沖縄学習センターで対面授業を基本とし、どうしても遠方で参加できない場合は遠隔対応を併用する、と伝えられていたが、コロナ禍の中、4月の段階ですでに「Zoomによるスクーリング実施」との通知を受けていた。

担当講師の厚意により、英語科指導法ⅠとⅡにおいてZoomによるスクーリングに一部参加させてもらったことで、レクチャーとそれにオンラインで参加する学生のイメージ、ブレイクアウトセッションが可能であることは把握できた。その上で、学生による指導演習にはブレイクアウトセッションを用いたグループワークを取り入れ、適宜チャットを使う可能性も視野に入れた。また、1限めの最初のつかみとして、投票機能を活用し、学生に回答させることで、質疑応答のやり取りを引き出すことにした。

ブレイクアウトセッションの実施では、6つのActivity(活動)を設定し、それぞれにおいて参加者の組み合わせに注意を払った。まず、教員経験者と未経験者を組み合わせ、年齢構成が近いメンバーとなるようにし、参加地が同地域に重ならないようにした。原則としてペア(2名組)と3名組としたが、最終的に全体として奇数の参加であったために、最後の組はペアもグループも同じ3名となった。知らない相手とすぐに打ち解けて、オンラインで積極的に協

働するのが、日本人は苦手であることを、自分自身の Zoom ブレイクアウト参加経験から痛感していたため、この日のブレイクアウトについては終日固定メンバーとし、グループの時はペアのメンバーが一部重複する編成とした。

同大学の Zoom スクーリングにおいては、顔を出して受講することが徹底されており、受講生もそれに従っていたが、教員側としては、資料を共有するとすべての参加者を同時に画面で見渡すことができなくなる。当然、主にパソコンの資料画面に向かって話すことになり、話を聞いているときの学生の表情は確認できなくなる。その問題点を解決するため、資料はあらかじめ配布し、自分で印刷して手元においてもらうように指示したが、その甲斐あって、画面共有での資料提示の時間を押さえることができ、直に受講生の表情をギャラリービューで確認しながら、やりとりを進める時間を確保することができた。

ブレイクアウトにおいては、参加者が、セッション中にやることを明確に把握したうえで分かれることも重要だと考え、各セッション中の課題 (Activity) はパワーポイントにも掲載してあらかじめ配布して手元で各自が確認できるようにした。また、その場においても、再度ブレイクアウト中にやるべきことを教員側がしっかり説明してから、ブレイクアウトするようにした。さらに、ブレイクアウト中は時間が許す限り、各ルームを回るようにした。これはちょうど、教室の対面授業でグループワークを行うときに、すべてのグループが間違いなくオンタスクに入れるかどうかをモニターし、必要なグループには支援に入る、という考えに基づくものである。

ブレイクアウト後に、協働した内容をクラス全体に還元し披露してもらう場面は、時間の制約が大きく、1 グループ程度のデモンストレーションになることは、ある程度想定内であった。しかし、前半の最初の 2 コマで終わる予定だった指導演習は、思った以上に時間がかかり、結局は Activity すべてを十分消化できず、Activity 5 (指導案の単元設定の記述比較) はチャットでの個人回答に切り替え、ルーブリックの作成演習 (Activity 6) も時間を切り詰める結果となった。しわ寄せは、4 コマめの「評価と指導」についてのレクチャー部分に及んだが、本務大学におけるそれまでの一連の遠隔授業対応から、「レクチャー部分は、もし途中で回線不良や切断になった時のために、資料のみを後

で参照しても、内容が把握できる程度まで作り込んでおく」ことを心掛けていたため、口頭での説明そのものは、残された時間内で要点のみまとめることで、スクーリングを終了できた。

## 5. 結果と考察

本項では、3つの授業実践を比較し、教員の遠隔授業の工夫に対する生徒の反応に基づき、効果を分析し、実施の留意点や課題を考察する。また、これらの実践を通して得た、教員としての成長について自己分析と評価を行う。

### 5.1 教員の遠隔授業の工夫に対する結果・考察

本項では先のリサーチ・クエスチョン(1)から(3)に対応する形で、考察していく。今回、複数のプラットフォームを利用し、オンデマンド対リアルタイム、動画(視聴覚)対文字ベースなど、異なる形式やモードを意識して、授業を行った。その結果明らかになったことの1つ目は、LMSとしてのWebclassの使い勝手の良さである。対面授業がメインだったときには、課題の提示・連絡、資料や様式の配布、課題の回収が主で、電子ファイルで時間を気にせずやり取りできるメリットと、提出したかどうかについて、教員と学生の齟齬を回避することが、Webclassを使っていた大きな理由だった。しかし、多くの本学学生も使ったことがあるWebclassはシンプルながら、窓口として使えば、そこから動画視聴のリンクやFlipgridなどにもつなげられる。また、課題レポートの提出とフィードバックに関しては、提出・受け取り、コメントなどの進捗状況を、教員・学生双方が自動で確認できることもメリットだった。さらに、掲示板を活用しての意見交換やQ&Aのやり取りが、想像以上にスムーズに運んだ。また、上級英語演習において、Google Documentで教員指定記事を読んでコメントを付けることで、非同期の学生同士の意見交換を想定していたが、書き込む際に先に付けられていたコメントや本文を消してしまう例が多発し、解決策としてWebclassの掲示板に質問とコメントを投稿する方法に切り替えた。結果として、混乱なく同じ目的は十分果たすことができ、改めてシンプルでわかりやすい方法が好ましいと実感した。手探りながら、オンデマンド/双方向、また動画/文字によるコミュニケーションを意識して複数のプラットフォーム



ホームを使い分けた結果、必ずしも複雑で凝った方法を取らなくとも、学生のコンピューターリテラシーや回線状況を考慮して、できるだけシンプルかつ少数回で済む方法を取り入れるべきだとわかった。

2つ目に、授業のオンライン化におけるフィードバックの重要性について述べたい。英語科教育法 B と上級英語演習においては、Webclass にワードで提出された課題については、個別に評価得点とコメント（フィードバック）を返却する機能があり、今まではクラス全体にフィードバックしていたものが、個別対応に切り替わった。そのことで、提出状況を頻繁にチェックし、次の授業回までに個別フィードバックを行った。メリットとしては、指摘や修正提案を個別に送り再提出を求めることができるため、基準点（B 相当）に到達するまで支援を行うことができた。特に上級英語演習の Review においては、英語ライティングにおける文法エラー、構成や気になる表現への指摘など、さらによりよいものにするにはどうすればよいかなど、受講生が持つ個々の課題に具体的に対応できたことで、徐々に提出物の質が向上した。しかし、このようなフィードバックは教員にかなりの時間的負荷がかかり、返却が遅れがちになることで、却って受講生が期待する時点までにフィードバックが行えないなどの問題も出てきた。そのため、特に Review 課題への取組に課題を抱える受講生への支援を視野に、先に述べたようにオンデマンド動画を作成し Stream で配信した。通常の対面授業であれば、そこまではやらなかったであろうし、講義時間中にそのような説明を行うこともしなかったに違いない。クラスの半分は、問題なく書けていたからである。動画は必要とする受講生だけが、よりよいライティングのために活用できるものであり、何度も繰り返し視聴できる。個別フィードバックだけではなく、このような方法を取り入れることで、より手厚く適切なフィードバックができることを、この実践は示している。

異なる遠隔授業形態で実施した、同じ「英語科教育法」の実践を比較すると、琉球大学での英語科教育法 B は後半、一部対面が許可され、それでも感染リスクを最小限に抑えるために、生徒役無しのエア授業を教員が録画し、授業者以外の受講生は録画ビデオをオンデマンドで視聴して、Webclass 掲示板にフィードバックを書き込む方式を取った。かなり限定的な対面ではあったが、

1つの模擬授業あたり50～60分という時間を充てることができ、教員自身は授業を担当した学生と個別に対面できたことで、Zoomのみですべて授業を進めた英語科指導法Ⅲとは、異なる教育効果があった。英語科教育法Bの受講者は本格的な模擬授業の経験がなく、次年度に控える教育実習に向けて、自らが構築した指導案に基づき授業演習を行うことは、過年度までの内容を踏まえても、科目の達成目標に不可欠な活動であったが、提出された模擬授業のふり返り課題レポートから、前年度までの受講生とそんな色のない気付きや学びがあったことが確認できた。

一方、Zoomのみで実施した英語科指導法Ⅲであるが、学校現場に勤務している受講者をブレイクアウトにおけるまとめ役としたことで、各ルームを見回った際にも、各グループで話し合いが進められていることを確認できた。そして、オンライン巡回により、取りかかりに困難を抱えている場合は適宜介入し、それは教室内でのグループ活動を俯瞰・指導する際と変わらないことが実感できた。また、音読演習で巡回した時には、発音の間違ひもあり、その指摘と修正はブレイクアウトから全体に戻った時のフィードバックとして行ったのだが、当日のふり返りレポートにおいて、複数名からこの指摘が有益だったとのコメントが見られた。しかし一方で、ふり返りレポートでは、すべてのグループがスムーズな共同作業を実施できたわけではなかったことも明らかになり、教室全体が見え、他のグループの雰囲気（取り組み状況）を感じたり、教員がすぐに気づいて支援・介入に入ることが難しいという限界も認識することとなった。なお、指導演習は英語科教育法Bでの模擬授業ほど本格的には行うことができず、グループでの演習成果も、2つのグループしか全体発表では取り上げることができなかった、それでもオンラインの画面越しに音読演習をし、本時の活動をグループで考えたことにより、クラスメート（受講生）から大きな刺激を受けたことが、スクーリングのふり返り課題からは読み取れた。さらに、本時の展開（活動）を考える際に、年間指導計画に記載の単元目標・評価規準を参照すべきとの指摘が、他のグループメンバーからあったことを示す記述は、筆者の予測を超えた的確な活動があったことを示唆していた。なおこのような現象は、現場教員がグループにおいて、既存の知識を応用した例と

して評価できる。オンラインであっても、学生同士のグループ活動を組み込むことは、教員対クラスの構図だけでは得難い効果を得られるものとして、今後もし取り入れ、より効果的な活用方法と注意すべき影響要因を探る必要があると感じた。

最後に、英語科教育法・指導法では、授業の構築・実施に必要な知識を修得し、教えるための指導演習が中心になるのに対し、上級英語演習では「いかに(4技能5領域の)英語コミュニケーション能力が向上したか」が問われる。前者がコンテンツ科目であるとするれば、後者はスキル科目である。そのため、上級英語演習は本来、All English の科目であり、そこでは当然、教員とのコミュニケーションも英語で行われることが望ましいという暗黙の了解があった。ただ今回の遠隔授業の中で、最初は指示ややり取りも英語で行っていたものが、課題指示(やるべきことを理解させる)の徹底やオンラインシステム・プラットフォームの使用方法についての説明は、徐々に日本語にせざるを得なくなっていた。対面の授業も同時並行であれば、学生の反応を見ながら、日本語に頼らずコミュニケーションを取ることができたと思うが、学生も慣れないオンライン授業に取り組んでいる中で、必要以上の負荷をかけることは得策とは言えない、との思いから、日本語の量が増えていったように思う。気になったため、学期末の独自アンケートで、英語と日本語の量についての意見を求めた結果では、概ね適切だったという評価に落ち着いたが、学生個々の英語力が一様ではない中で、日本語を使う場面と英語を使う場面を適切に使い分けるのは難しく、今後考えなければならない課題だと感じる。

教授時の使用言語の問題は、取りも直さず、科目の到達目標とクラスの活動・事前事後課題の整合性との問題でもある。英語科教育法・指導法においては、コンテンツの修得に主眼があるため、媒介言語は英語である必要がない。それに対して、上級英語演習では、すべての活動において、英語での「読む」「聞く」「話す(やりとり・発表)」「書く」のどの伸長に寄与するのかを意識し、それらをバランス良く配置し、英語を使う場面設定を明確にする必要があった。この科目においては、英語を使わせる仕掛けが不可欠であり、身に付けさせたい技能に応じてプラットフォームを使い分けなければならなかった。そ

の結果、使用するプラットフォームが多岐にわたり、1つ1つの課題がとても細かくなってしまった。最後までついてきた学生は力が付いたと思うが、課題が細かく数が多かったことで、一度休んだり、止まったりすると進捗を見失いやすく、特に学期後半で課題提出の遅れや未提出、継続をあきらめる受講生が増え始めた。大きな反省点である。

## 5.2 遠隔授業準備・実施を通じた教師としての成長

コロナ禍は否応なしに、授業のオンライン化を多くの大学教員に迫ったため、筆者自身の変化は、学内・国内の多くの教員と共通するものであろう。ここでは、リサーチクエスション(4)について、分析結果をまとめる。教員としての成長を感じる場面は多くあったが、オンラインプラットフォームを使うスキルの向上、遠隔授業の特性に対応した自分自身の授業準備への変化、そして授業内容を授業外の現実社会と結びつけて掘り下げようとする態度の変化に分けて述べる。

2020年4月から5月初頭にかけての筆者の状況に関しては、2.に記述した通りである。その後、1学期間の遠隔授業を経て、リアルタイム配信への不安は払しょくされ、画面に向かっての講義にも慣れた。しかし、学生と全く対面を想定せずに、画面越しに学生の実態を把握しようとしても、なかなかうまく行かなかった。クラス全体としてうまく進んでいるのか、自分の説明が学生の理解まで届いているのか、不安の中での授業が続いたと思う。上級英語演習においては、3回に1回の Teams によるレクチャー回に欠席者がいると、コンピュータや Wi-Fi 環境に問題があるのか、プラットフォームの使用方法がわからないのか、課題の取組に問題を抱えているのか、それとも授業とは全く関係のないところで問題が生じているのかがわからず、対応に苦慮した。その一方で、個別のメール対応で反応がある学生に対しては、今までの対面授業以上に個別相談に乗ったり、学修の支援を行うことができた。

Teams でつながっているときだけが、双方向にコミュニケーションできる機会ではあったが、オンラインは不確実なところもあり、「〇〇さんが、今日はインターネットのつながりが悪くて、入れないと言っています」と他の受講生が教えてくれたり、「回線の状況が悪いので、今日はこれで失礼します」と

のチャットの伝言が残っていることもあった。そのため、何かあった時は後でパワーポイントの資料だけ見ても、授業内容が把握できるように、かなり細かく資料に書き込んでおくようにした。また、対面の場合は資料を説明しながら、間違いがあったらその場で訂正したり、わかりにくいところは口頭で補足できたが、その機会が見込まれないことから、資料は読んだだけで伝わり、ミスがないように、細心の注意を払った。また、回線の不具合等で参加できなかったときに備え、授業は録画して、後で視聴できる状況を常に作っていた。このように、自分自身の授業準備の在り方には大きな変化が見られ、多様な状況におかれた学生の学びの機会確保のため、幾重にもセーフティネットを張る教え方になっていった。

さらに、学生とのコミュニケーションがより個別化したことから、教材の掘り下げ方並びに個別の学生のニーズや、状況に応じた課題によるコミュニケーションが活発となった。上級英語演習では、TIME Online の記事を読んで Review の提出を行ったが、そこに書かれた内容からは、コロナの影響で留学の夢が断たれたり、生活の中で楽しみにしていたイベントに全く参加できなくなり、落ち込んだりしている学生の姿が浮き彫りになった。TIME Online の英文記事もコロナ一色で、世界やアメリカのパンデミックの様子を知る重要なリソースとなっており、コロナ禍だからこそ、世界の情報とつながり多様な意見に触れることに大きな意義があったと感じている。記事を読んでしっかりと理解してもらおうと、Pre-reading activity の設問を工夫し、それを基に教室の外とつなげる工夫も行った。

## 6. まとめと今後の課題：ハイブリッド型の授業を目指して

本稿の執筆にあたり、2020 年前期の自らの遠隔授業実践をふり返って比較分析したことで、授業を行っていた時には夢中で決定・選択していたプラットフォームの活用や、授業デザインが妥当であったのか、次に同じ授業を実施するときの課題は何かを問い直すことができた。2020 年後期が開始した段階で、英語科教育法 B の継続として英語科教育法 C を 2 クラス担当しており、再度教授法クラスを実施する中で、オンラインでできることと、対面が効果的

であることの切り分けと実践を行っている。キャンパス内入校禁止となった4月末～5月のような緊迫感は薄れ、一部の対面授業や、大学内の建物でオンライン授業に参加する学生も一定数存在する。ほぼ完全に遠隔のみで授業を実施した、ここでの3科目の実践は、もう2度とここまでの対応は迫られないのかもしれない。その意味において、むしろ貴重な経験であり、教員としての経験値を飛躍的に向上させるまたとない機会だったといえる。

本稿で示したように、コロナ禍での強制的遠隔授業は、様々なオンラインプラットフォームの可能性と限界を筆者に自覚させた。次に来るのは、受講する学生に多様な学びの選択肢を提供すること、その中で受講生のクラス全体としてのダイナミクスを意識した、学びの最適化のためのハイブリッド型の授業であろう。向後（2020）によると、受講生どうし、また受講生と教員が対面で授業をしたり、接した経験がある場合とない場合では、オンライン授業の評価が異なる。一度も実際に会ったことがない者同士が集まったクラスでの遠隔授業は、評価が下がる傾向にあるという。学習者の学習スタイルや動機づけに配慮するだけでなく、遠隔授業に特有の影響要因が今後明らかになれば、その知見を取り入れつつ、さらに効果的な対面とオンラインの組み合わせが実現することになる。2020年の目まぐるしい変化は、終息後のポストコロナ時代に、そのような産物を結果として残すに違いない。着地点はまだ見えないが、より効果的な授業に向けて、研究と実践を重ねていきたい。

## 引用文献

大学ジャーナルオンライン. 「文部科学省、大学等の授業の開始等について通知」 2020年3月25日. <https://univ-journal.jp/31270/> (2020年10月15日ダウンロード)

国立情報研究所. 「4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」 ホームページ <https://www.nii.ac.jp/event/other/decs/#19>

向後秀明. 「対面でも遠隔でも変わらぬ英語授業の本質 - 遠隔授業の実践から見てきたこと・再確認できたこと」 *Cambridge Day Online Japan Seminar #1* 発表資料. (2020年9月13日)

- 毎日新聞.「沖縄、コロナ警戒レベル 病床占有率と新規感染が「感染蔓延期」に1  
カ月半ぶり／沖縄」2020年10月22日. [https://mainichi.jp/articles/20201022/  
rky/00m/040/006000c](https://mainichi.jp/articles/20201022/rky/00m/040/006000c) (2020年10月25日ダウンロード)
- 文部科学省.「令和2年度における大学等の授業の開始等について（通知）」  
2020年3月24日. [https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt\\_  
kouhou01-000004520\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf) (2020年10月25日ダウンロード)
- 文部科学省.「学事日程等の取扱い及び遠隔授業の活用に係るQ&Aの送付に  
ついて（4月21日時点）」[https://www.nii.ac.jp/news/upload/20200424-2\\_  
Nishiyama.pdf](https://www.nii.ac.jp/news/upload/20200424-2_Nishiyama.pdf) (2020年10月25日ダウンロード)
- 西山崇志. (2020).「大学・高専における遠隔授業の環境構築の加速による学修  
機会の確保～文部科学省高等教育局の対応状況～」NII シンポジウム  
2020年4月3日発表資料. [https://www.nii.ac.jp/news/upload/20200410-4\\_  
Nishiyama.pdf](https://www.nii.ac.jp/news/upload/20200410-4_Nishiyama.pdf) (2020年10月25日ダウンロード)
- 沖縄タイムス.「コロナ休校、小中学校の再開は5月11日～21日 県内28市  
町村 分散登校も検討」2020年5月8日.

## An Analysis of Three Online Courses under the COVID-19 Pandemic

Mitsuyo TOYA

This paper reports three online teaching practices in Spring 2020, in the middle of the COVID-19 pandemic. By examining the designs, online platforms, and students' reactions, the author made an attempt to evaluate the effects of such virtual teaching/learning compared to face-to-face classes. The three courses included English teaching methodology B and Intermediate English Seminar at University of the Ryukyus as well as a corresponding university course which also dealt with the English teaching methodology. The results showed that a simple, familiar LMS such as the Webclass was found effective and that group work with the Zoom breakout-room function can lead to a fair microteaching demonstration online. Although the online courses were promoted as a byproduct of the pandemic, the author recognized her skill enhancement in learning about ICT and redesigning and conducting classes based on such knowledge gained while observing students' responses.

Keywords: COVID-19, online platform, ICT, English teacher development